Takasaka
Bible Forum

クリスチャンと聖霊の働き

～聖霊論を学ぶ～

講 師　神戸 基秀

高坂聖書フォーラム

目次

はじめに …… 1

第１章　聖霊について …… 2

１．聖霊の本質　2

２．歴史における聖霊の働き　4

第２章　クリスチャンと聖霊の働き …… 6

１．救われた時に起こること　6

２．成長の過程で起こること　10

第３章　聖霊の賜物 ……12

１．聖霊の賜物とは何か　12

２．聖霊の賜物の種類　15

３．奇跡的賜物について　19

４．聖霊の賜物を用いるために　22

はじめに

本書は、聖霊なる神についての聖書の教え（専門的に「**聖霊論**」といいます）の入門編テキストです。聖書の教えは様々な分野にわけることができますが、聖霊論は、特にクリスチャン生活に影響を及ぼす分野といっても良いでしょう。なぜなら、今は聖霊というお方を通して、三位一体の神が私たちに働いてくださる時代だからです。

キリスト教神学には1,900年以上にわたる長い歴史がありますが、聖霊論はいつも重視されてきたわけではありませんでした。特に聖霊の働きについての教えが大きく注目されるようになったのは、20世紀に入ってからだと言われています。父なる神について、キリストについて、救いについて、教会について……など、教会の歴史を通して、様々な分野の教えが深く掘り下げられてきました。ついに聖霊についての教えも詳しく研究されるようになっていることを思うと、筆者は神に感謝せざるを得ません。

しかし、他の教えに比べて注目されたのが最近であるからこそ、この分野には混乱や意見の違いがたくさん見られることも事実です。このような時代にあって、私たちクリスチャンには、しっかりと聖書に基づいて聖霊について学ぶことが求められていると思います。

本テキストは、聖霊論の中でも特にクリスチャン生活と深く関係している「クリスチャン生活における聖霊の働き」と「聖霊の賜物」を主なテーマとして選びました。また、**第１章**ではイントロダクションとして、聖霊の本質や歴史における聖霊の働きについても簡単に取り上げています。各テーマについて詳しく学ばれる際には、参考として挙げてある聖句を中心として、聖書研究に取り組まれると良いと思います。

ちなみに、高坂聖書フォーラムの「キリスト教ミニレッスン」第17回〜第22回および第39回でも聖霊論が扱われています。本テキストの**第１章**および**第２章**はミニレッスンの内容と重複しているところが多いので、ぜひ教会のホームページで公開されている各レッスンも参考にしてみてください。

読者の皆さまが、それぞれの信仰生活と聖霊の働きの繋がりを学ばれる上で、本書が少しでもお役に立てれば幸いです。

第１章

聖霊について

本章のアウトライン

１．聖霊の本質
２．歴史における聖霊の働き

１．聖霊の本質

１－１．聖霊についての記述

旧約聖書でも新約聖書でも、聖霊を指して「御霊」と訳されている言葉が出て来ます。これはヘブライ語で**ルアハ**、ギリシャ語で**プニューマ**という言葉です。ルアハもプニューマも「息」、「風」、「霊」という３つの意味を持っています。また、単語としての第一義的な意味は、「息」や「風」の方です。息や風という意味の単語が使われていることで、聖霊のご性質がよく分かります。風は目に見えませんが、力を持っています。それと同じように、聖霊もまた私たちの目には見えませんが、実際に力を持っておられる方なのです。

ほとんどの場合、聖書の中で聖霊はただ「御霊」と呼ばれているか、「主の御霊」や「神の御霊」といった形で呼ばれています。私たちが今使っている「聖霊」という呼び方は、新約聖書で頻繁に使われています。この呼び方は、ギリシャ語では「聖なる」という意味の**ハギオス**とプニューマを組み合わせて、**プニューマトス・ハギオウ**といいます。「聖なる」という言葉は「特別にとりわけられた」という意味を持っています。よって、「聖霊」という呼び方は、**この方が人間の霊とは違う、特別な神の霊である**ことを表しているのです。

１－２．聖霊は神である

特に旧約聖書を読んでいると、「神の御霊」は、単純に神の力のことを言っているだけではないかとも思えます。しかし、聖霊は父なる神やキリストと同じように、「人格」のある神であることが分かります。ここでは、**聖霊が人格を持っておられる**ということと、**聖霊が神である**ということを確認していきましょう。

まず、聖霊に人格があるならば、聖霊には**知性**・**感情**・**意志**（いわゆる知情意）があるはずです。新約は、聖霊がこの３つの特徴を持っておられることをはっきりと教えています。その例をひとつずつ見ていきましょう。

知性：聖霊は私たちに「すべてのことを教え」てくださる方です（ヨハ14:26）。誰かに教えるためには、知的な能力が必要です。よって、聖霊は知性を持っておられます。

感情：パウロは「神の聖霊を悲しませてはいけません」と書いています（エペ4:30）。聖霊が悲しみを覚えられるということは、この方が感情を持っておられるということです。

意志：パウロはまた「御霊は、みこころのままに、一人ひとりそれぞれに賜物を分け与えてくださるのです」と書いています（Iコリ12:11）。興味深いのは「御霊は、みこころのままに」と書かれていることです。ここを直訳すると「御霊は、望まれるとおりに」となります。聖霊が何かを望まれるということは、聖霊が意志を持っておられるということです。

次に、聖霊が神であるということを見ていきましょう。このテーマを議論する方法はいくつか考えられますが、ここでは、聖霊が父なる神ともイエス・キリストとも区別されている神であるということを確認していきます。

イエスは復活された後、弟子たちに「父、子、聖霊の名において」人々にバプテスマを授けなさいとお命じになりました（マタ28:19）。イエスは「父」、「子」と「聖霊」を同列に置いていますが、はっきりと区別もしておられます。

同じように、パウロも「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがたすべてとともにありますように」と祈っています（IIコリ13:13）。

よって、聖霊は単なる神の力などではなく、父なる神、イエス・キリストと並ぶ、神の３つ目の位格であるといえるのです。

２．歴史における聖霊の働き

本テキストのテーマは、教会時代に生きるクリスチャンに対する聖霊の働きを学ぶというものです。その本題に入る前に、教会時代に至るまで、聖霊がどのような働きをして来られたのかを大まかに追いかけてみましょう。（なお、より詳しくはキリスト教ミニレッスンの第18回と第19回を学んでいただきたいと思います。）

２−１．旧約時代の聖霊の働き

第一に、**聖霊は天地創造の働きに関与されました**（ヨブ33:4；詩104:30；イザ40:12–14などを参照）。旧約は、特に人間の創造において聖霊が働かれたことを強調しています。

第二に、**聖霊は人々に啓示をお与えになりました**（IIペテ1:21）。イエスや使徒たちは、ダビデが詩篇で歌った内容は、聖霊によって言われたものだと表現しています。

第三に、**聖霊は、神から特別な役割を与えられた人々の内側に宿られました**。そして、その人々が役割を果たすための力をお授けになりました。特別に聖霊が与えられた人々としては、たとえばヨシュア（民27:18）、サムソン（士13:25）、サウル（Iサム10:10）、ダニエル（ダニ6:3）などが挙げられます。

しかし、その人々の役割が完了すると、聖霊は彼らから離れていかれたようです。たとえばサムソン（士16:20）とサウル（Iサム16:14）については、ある時点で聖霊が彼らから離れたと記されています。

２−２．イエスの生涯と聖霊の働き

イエスの生涯は、旧約時代の一番最後に当たります。子なる神ご自身が人となって来られた方であるイエスの生涯では、聖霊が力強く働かれました。

まず、処女マリアがイエスを身ごもったのは、聖霊の力によるものだったと教えられています（マタ1:18, 20；ルカ1:35）。

次に、イエスがヨハネからバプテスマを受けられた時、聖霊が降られました（マタ3:16；マコ1:10；ルカ3:22；ヨハ1:32）。

さらに、イエスの公生涯で奉仕の力をお与えになったのは、聖霊でした（ルカ4:16–21；使10:38）。

旧約時代には、聖霊が内側に住まうというのは、特別な役割を与えられた人だけに与えられる祝福でした[1]。その時代で聖霊が降った最後にして最大の人物が、イエス・キリストです。イエスは、メシアという最高に特別な役割を果たすため、聖霊の力によって生涯を歩まれました。イエスの教えも、奇跡も、すべて聖霊に力づけられた働きだったのです。

そして、このイエスによって、聖霊の働きが限定的だった古い時代の終わりが告げられることとなったのです。

２−３．ペンテコステの日以降の聖霊の働き

イエスは、死を目前にして弟子たちに語られた最後のメッセージで、ご自分が天に上げられた後、聖霊をお与えになると約束されました（ヨハ14:17；16:7など）。また、復活された後、まさに天に上げられる直前にも、弟子たちが「間もなく、聖霊によるバプテスマを授けられる」と約束されました（使1:5）。

「聖霊によるバプテスマ」については、**第２章**で改めて取り上げます。大切なことは、イエスが天に上げられると聖霊が遣わされるということです。その目的は、聖霊を与えられた人々が「エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで」イエスの「証人」になるためです（使1:8）。

聖霊が遣わされるという約束は、使徒の働き２章から実現し始めました。イエスが天に上げられた直後のペンテコステの日、ある場所に集まっていた信者たち全員に聖霊が注がれました（使2:33）。

ペンテコステの日に聖霊が降られたのは、イスラエル人の信者グループでした。その後、キリストを信じるサマリア人（使8:14–17）と異邦人（使10:44–47）にも聖霊が降るという出来事がありました。こうして、ユダヤ人か異邦人かということは関係なく、キリストを信じるすべての人の内側に聖霊が住んでくださり、力づけてくださるようになったのです。

---

[1] James M. Hamilton, Jr., *God's Indwelling Presence: The Holy Spirit in the Old and New Testaments*, NAC Studies in Bible and Theology (Nashville, TN: B&H, 2006).

第２章

クリスチャンと聖霊の働き

本章のアウトライン

１．救われる時に起こること
２．成長の過程で起こること

１．救われる時に起こること

本テキストでは、人が救われる時に起こる聖霊の働きを５つ、またクリスチャンとして成長の過程で行われる聖霊の働きを１つ挙げてあります。クリスチャンに対する聖霊の働きはこの６つだけでは表し切れませんが、ここで扱う内容について聖書研究を積み重ねることで、聖霊の働きの豊かさがますます分かってくることでしょう。

救われる時に起こる聖霊の働きは、以下の５つの側面を持っています。

１．新生
２．聖霊によるバプテスマ
３．内住
４．証印
５．賜物の付与

これらの聖霊の働きを１つずつ確認していきましょう。（ただし、５．については**第３章**で詳しく学びます）

１−１．新生

人の救いは、とても不思議なものです。まず、罪人が神に立ち返るために、神ご自身がその人の心に働きかけてくださいます。そして、その罪人は働いてくださった神に応答し、イエス・キリストを信じることによって、元々受けるべきだった永遠の刑罰から救われます。

人が救われる時、神は聖霊を通して、その人を新しく生まれさせてくださいます（ヨハ1:13；3:5–8；テト3:5など）。その聖霊の働きが**新生**です。

新しく生まれたということは、新しい「いのち」の中で生き始めたということです（IIコリ5:17参照）。この「いのち」のことを、聖書は「永遠のいのち」と呼んでいます（ヨハ3:16）。ヨハネの福音書17:3によれば、永遠のいのちとは、父なる神とイエス・キリストを「**知り続けること**」（筆者訳）です。ここでの「知る」は、体験的に知ることを意味しています。永遠のいのちとは、**神の交わりの中で生き続けるいのち**なのです。

このいのちは「永遠」なので、決して終わることがありません。聖霊によって新しく生まれたクリスチャンが、神との交わりから切り捨てられてしまうことはあり得ないのです。

１−２．聖霊によるバプテスマ

バプテスマのヨハネは水でバプテスマを授けましたが、イエスは「聖霊でバプテスマを授けられます」と言われています（マタ3:11；マコ1:8；ルカ3:16）。イエスご自身も、使徒たちに「あなたがたは間もなく、**聖霊によるバプテスマ**を授けられる」と言われました（使1:5；11:16）。

この聖霊によるバプテスマを詳しく教えているのが、第一コリント12:13です。

> 私たちはみな、ユダヤ人もギリシア人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によってバプテスマを受けて、一つのからだとなりました。そして、みな一つの御霊を飲んだのです。（Iコリ12:13）

「バプテスマを授ける」とか「バプテスマを受ける」と訳されている言葉は、原文のギリシャ語ではバプティゾウという一つの動詞です。この動詞は何かを浸ける、沈めるといった意味で、たとえば染め物をする時、布を染料に浸ける時などに使います。イエスが「聖霊でバプテスマを授ける」、また私たちが「御霊によってバプテスマを受けた」という表現には、**イエスご自身が私たちを聖霊の中に沈められた**というイメージがあります。

「私たちはみな」聖霊によるバプテスマを受けたということは、クリスチャンは全員この祝福を受けたということです。この祝福の結果、クリスチャンは「一つのからだ」となりま

す。この聖句がある文脈（Iコリ12:11–27）のテーマは、それぞれの信者が「キリストのからだ」に繋がっているというものです。この「キリストのからだ」とは、教会を表しています。ここでいう教会とは建物としての教会ではなく、イエス・キリストを信じた人全体のことで、専門的には**普遍的教会**と呼ばれているものです。

よって、聖霊によるバプテスマというのは、私たちをキリストのからだに結びつける働き、つまり私たちを普遍的教会の一員にする働きなのです。

さらに、第一コリント12:13では、私たちが聖霊に沈められた時に聖霊を飲み、外側も内側も聖霊でいっぱいになっているというイメージも伝えられています。これは、聖霊によるバプテスマの結果、聖霊が私たちの内側にも住んでくださるようになったということなのでしょう。

まとめると、聖霊によるバプテスマとは次のような働きのことです。

- イエスは私たちを聖霊に沈め、私たちと聖霊を一つにされた。
- 聖霊は私たちの内側も満たしてくださった。
- 私たちは聖霊を通して「キリストのからだ」なる教会に結びつけられた。

聖書の教えによれば、イエス・キリストを信じた人で、普遍的教会の一員でない人や、聖霊が住んでおられない人はいません。よって、**聖霊によるバプテスマは、人がイエスを信じて救われた時に与えられる祝福である**ということになります。

１－３．内住

信者の内側に聖霊が住んでくださるという祝福は、神学用語では聖霊の**内住**と呼ばれています。**第１章**でお伝えしたように、旧約時代では、聖霊の内住は特別な役割を与えられた人に限定された祝福でした。しかし、新約時代では、イエスを信じるすべての人にこの祝福が与えられています。

パウロは「キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません」と教えています（ロマ8:9）。これは、信者には聖霊が与えられているということを、逆から言っているのです。

聖霊が内住してくださったことによる祝福は、計り知れません。その一例を挙げておきましょう。

- 内住の聖霊は、私たちを真理に導き、私たちにキリストの栄光を現してくださる（ヨハ16:13–14）。
- 内住の聖霊は、私たちが神のうちにとどまり、神も私たちのうちにとどまっておられることを教えてくださる（Iヨハ4:13）。

・　内住の聖霊は、私たちの復活の希望を保証してくださる（IIコリ5:5）。

聖霊は、私たちの内側から私たちを教え、導き、希望を与えてくださいます。私たちはこの方によって、日々整えられていくのです。

１－４．証印

内住の聖霊が私たちの希望を保証してくださっているということは、「聖霊によって証印を押された」とも表現されています。

> 13このキリストにあって、あなたがたもまた、真理のことば、あなたがたの救いの福音を聞いてそれを信じたことにより、約束の聖霊によって証印を押されました。14聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証です。このことは、私たちが贖われて神のものとされ、神の栄光がほめたたえられるためです。（エペ1:13–14）

ここでは、キリストの福音を信じた人が約束の聖霊によって証印を押されたのだと教えられています。「証印」とは、何かを証明するために印を押すことです。当時の証印はろうを垂らして、その上に印を押しつけるというものでした。証印を行う主な目的は、印を押した物の所有権をはっきりさせることにあります[2]。つまり、**聖霊は私たちが神のものであることをはっきりさせてくださった**のです。

さらに、内住の聖霊は「私たちが御国を受け継ぐことの保証です」とも言われています。「保証」という言葉は「手付金」と訳すこともできます。たとえば、今でも家を買ったり部屋を借りたりする時、本当に買うという保証として手付金を支払います。神は、クリスチャンにご自分の御国を受け継がせるという契約の手付金として、聖霊を住まわせてくださったというのです。

まとめると、内住の聖霊は、２つのことを保証してくださっています。

１．クリスチャンは神ご自身の所有物である
２．クリスチャンは神の御国を受け継ぐ

私たちは聖霊を与えられているという事実によって、**神から引き離されてしまうことは絶対にない**、そして**絶対に神の御国に入ることができる**と確信することができるのです。

---

[2] Harold W. Hoehner, *Ephesians: An Exegetical Commentary* (Grand Rapids: Baker, 2002), 238.

2．成長の過程で起こること

これまで、私たちクリスチャンが救われた時に聖霊がどのような働きをしてくださったかを学んできました。内住の聖霊は、私たちがクリスチャンとして成長していく過程でも豊かに働いてくださいます。その働きについての表現のひとつが聖霊の**満たし**です。

> 18また、ぶどう酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。むしろ、御
> 霊に満たされなさい。19詩と賛美と霊の歌をもって互いに語り合い、主に向かって
> 心から賛美し、歌いなさい。20いつでも、すべてのことについて、私たちの主イエ
> ス・キリストの名によって、父である神に感謝しなさい。21キリストを恐れて、互い
> に従い合いなさい。（エペ5:18–21）

パウロはここで、聖霊に「満たされなさい」と命じています。ここにあるニュアンスを汲み取ると、「聖霊に満たされ続けなさい」となります。しかし、既にクリスチャンの内側に聖霊が住んでくださっているのであれば、「満たされ続けなさい」とはどういう意味なのでしょうか。

パウロは、お酒に酔うことと聖霊に満たされることを比べています。「ぶどう酒に酔ってはいけません」とは、酔っ払うことを禁じる命令です。酔っ払ってお酒に支配されてしまうのではなく、**聖霊によって良い方向へコントロールされ続けなさい**というのが「聖霊に満たされ続けなさい」という命令の意味です。

お酒に満たされてしまうと「放蕩」に繋がりますが、聖霊に満たされるとどういう結果に繋がるかが、19–21節で教えられています。私たちは聖霊に導かれて、主に向かって心から賛美します。いつでも、すべてのことについて、主の御名によって父なる神に感謝します。そして、キリストを恐れて、互いに従い合います。私たちが内側におられる聖霊に信頼して身を委ねるとき、聖霊は、私たちを神が喜ばれる生き方へ導いてくださるのです。

それでは、具体的にどうすれば聖霊に満たされ続けることができるのでしょうか。このことについてヒントを与えてくれているのが、同じくパウロが書いたコロサイ3:16–17です。

[16]キリストのことばが、あなたがたのうちに豊かに住むようにしなさい。知恵を尽くして互いに教え、忠告し合い、詩と賛美と霊の歌により、感謝をもって心から神に向かって歌いなさい。[17]ことばであれ行いであれ、何かをするときには、主イエスによって父なる神に感謝し、すべてを主イエスの名において行いなさい。

この聖句の内容は、先ほど取り上げたエペソ5:18–21とよく似ています。エペソ書では、聖霊に満たされ続けることによって賛美し、感謝しなさいと教えられていました。一方で、コロサイ書では「キリストのことばが、あなたがたのうちに豊かに住むようにしなさい」と言われています。そこから始めて、互いに忠告し合うこと、賛美すること、神に感謝することなどが命じられているのです。つまり、聖霊に満たされることも、「キリストのことば」が豊かに住むようにすることも、神に喜ばれる生き方に繋がっているということです。

私たちの内側を神のみことばでいっぱいにすればするほど、私たちに対する聖霊の影響は大きくなっていきます。よって、聖霊に身を委ね、聖霊に導いていただくには、**神のみことばである聖書を読み学ぶこと**がとても大切なのです。

これは、聖句を暗記すれば聖霊に満たされるということではありません。覚えることは重要ですが、内容が分かっていなければ意味がありません。私たちは聖書を読んで、神についてさらに知り続けていくことが大切です。そうすれば、神に喜ばれる生き方とはどういう生き方なのかを知ることができます。聖書を学ぶうちに、互いに愛し合い、互いに従い合うということを、神がどれほど喜んでくださるかがわかってきます。そして、自分たちもそのような生き方を送りたいと、心から思えるようになってくるでしょう。

聖霊は、このような私たちの姿勢に寄り添い、私たちを導き続けてくださるのです。

第３章

聖霊の賜物

本章のアウトライン

１．聖霊の賜物とは何か
２．聖霊の賜物の種類
３．奇跡的賜物について
４．聖霊の賜物を用いるために

１．聖霊の賜物とは何か

クリスチャンの信仰生活の中でも、クリスチャン同士の交わり（特に地域教会での交わり）と最も直接的な関わりのある聖霊の働きは、この方が私たちに「賜物」を与えてくださったということです。

使徒ペテロは、私たちそれぞれが与えられている賜物の「良い管理者」となり、それぞれの賜物を用いて「互いに仕え合いなさい」と教えています（Iペテ4:10）。本章では、聖霊が与えてくださった、私たちが仕え合うために用いるべき「賜物」について学んでいきましょう。

１－１．聖霊の賜物を表す主な用語

新約聖書が聖霊の賜物に使っている主な用語のひとつは**カリスマ**というギリシャ語です。これは、基本的には「無償で、また恵みによって与えられたもの」という意味の言葉です[3]。よって、聖書が言っている「賜物」とは「神の恵みによって、代価を払うことなしに与えられる贈り物」のことです[4]。

ある箇所では、「賜物」は「永遠のいのち」を指しています（ロマ5:15–16；6:23）。イエスを信じることで与えられた永遠のいのちも含めて、神からいただいた祝福全体が「賜物」なのです。しかし、新約でカリスマという言葉が出て来る全17回中、少なくとも10回は預言、奉仕、教え、癒やしなどの特別な役割や能力を指しています[5]。カリスマとは、より狭い意味では、**神が個々のクリスチャンに特別な役目のためにお与えになった贈り物**のことであるといえます。

賜物を表すもう一つの用語は**プニューマティコス**というギリシャ語です。この言葉は名詞ではなく、「霊的な」とか「霊の」という意味の形容詞です。しかし、第一コリント12:1と14:1では「賜物」を指してこの形容詞が使われています。つまり、**神が個々のクリスチャンにお与えになった賜物（カリスマ）は、聖霊によって与えられたものである**ということが強調されているのです[6]。

１－２．聖霊の賜物の特徴

A．聖霊の賜物は能力である。

パウロは聖霊の賜物として「預言」、「奉仕」、「教え」、「勧め」、「奇跡を行う力」、「異言」などを挙げています（ロマ12:6–8；Iコリ12:7–10）。これらは一種の**能力**です。よって、聖霊の賜物とは、何らかの能力のことだといえます。

B．聖霊の賜物は三位一体の神から、特に聖霊を通して与えられる。

用語の観察で確認したように、聖霊の賜物は、聖霊によって与えられます（Iコリ12:4，7–11参照）。また、第一コリント12:11では、聖霊ご自身が「みこころのままに、一人ひとりそれぞれに賜物を分け与えてくださるのです」とはっきり教えられています。

---

[3] W. Bauer, F. A. Danker, W. F. Arndt, and F. W. Gingrich, *A Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature*, 3rd ed. (Chicago: The University of Chicago Press, 2000), 1081.

[4] James F. Stitzinger, “Spiritual Gifts: Definitions and Kinds,” *The Master’s Seminary Journal* 14/2 (Fall 2003): 151.

[5] ロマ12:6; Iコリ1:7; 12:4, 9, 28, 30, 31; Iテモ4:14; IIテモ1:6; IIペテ4:10。

[6] Stitzinger, “Spiritual Gifts,” 151–52; Thomas R. Schreiner, *Spiritual Gifts: What They Are and Why They Matter* (Nashville, TN: B&H, 2018), 15.

実際には、聖霊の賜物の付与には三位一体の神全体が関わっておられます。パウロは第一コリント12:12以降で、一人ひとりそれぞれに賜物が与えられているのだから、それぞれが教会の中で大切な役割を担っているのだと教えています。その中で、教会という「キリストのからだ」の各部分を備えてくださったのは神ご自身だと言われています（12:18）。つまり、教会の中で様々な役割分担を備えてくださったのは神です（12:28）。

一方で、エペソ4:11では、教会における役割分担を備えられたのは「キリストご自身」であるとも言われています。よって、聖霊の賜物とは、父なる神が、キリストを通して遣わされた聖霊によって、個々のクリスチャンに分け与えてくださるものなのです。

C．聖霊の賜物はすべての信者に与えられる。

パウロは賜物が「私たち」（ロマ12:6）、「一人ひとり」（Iコリ12:7，11）に与えられていると教えています。聖霊の賜物は、クリスチャン一人ひとりに与えられています。

D．聖霊の賜物は人が救われた時に与えられる。

聖霊によるバプテスマを教えている第一コリント12:13は、聖霊によって賜物が与えられるという文脈の中に置かれています。聖霊によるバプテスマは、クリスチャンをキリストのからだと一つにするという働きです。一方で、聖霊の賜物は、キリストのからだなる教会を成長させていくために、それぞれのクリスチャンに与えられている能力です。バプテスマも賜物も、両方とも教会と関係しているのです。よって、聖霊の賜物は、人が救われた時（つまり、聖霊によるバプテスマを受けた時）に与えられるものだと考えられます。

E．聖霊の賜物は信者が互いに仕え合い、教会が成長するために与えられる。

教会において一人ひとりに役割が与えられている理由は「互いのために、同じように配慮し合うため」です（Iコリ12:24–26）。また、「聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるため」とも言われています（エペ4:12）。

聖霊の賜物は、教会における個々の役割を果たすために与えられています。各々が教会で賜物を用いて仕え合うことで、教会全体が成長していきます。そして、教会が成長していくことは、教会の主であるキリストを通して神ご自身があがめられることにつながっていくのです。

１－３．聖霊の賜物の定義

これまでのまとめとして、聖霊の賜物を定義しておきましょう。

聖霊の賜物とは、教会を成長させるために個々のクリスチャンに与えられた、何らかの能力のことです。この能力は、父なる神が、キリストを通して遣わされた聖霊によりお与えになった「恵みの贈り物」です。

2．聖霊の賜物の種類

聖書は様々な賜物を具体的に紹介しています。そういった賜物が紹介されている箇所と、紹介されている賜物を以下の**表**にまとめておきます。神は、教会を成長させるために、あらゆる賜物を備えてくださっているのです。

なお、いずれの箇所も、賜物をすべてリストアップする目的で書かれているわけではありません。しかし、ここに書かれていない賜物があるとも教えられていません。原則としては、聖書が教えていない賜物を無理に求めないようにしましょう。

表　聖霊の賜物のリスト[7]

	ロマ12:6–8	Iコリ12:7–10	Iコリ12:28	エペ4:11
1			使徒たち	使徒
2	預言	預言	預言者たち	預言者
3				伝道者
4		霊を見分ける力		
5	教え	知恵のことばと 知識のことば	教師たち	牧師また教師
6	勧め			
7		奇跡を行う力	力あるわざ	
8		癒やしの賜物	癒やしの賜物	
9	奉仕		援助	
10	指導		管理	
11		種々の異言	種々の異言	
12		異言を解き明かす力		
13	分け与える			
14		信仰		
15	慈善を行う			

[7] 参照：Schreiner, *Spiritual Gifts*, 18.

それでは、それぞれの賜物について見ていきましょう[8]。（なお、以下のリストの順番は前ページの表から変えてあります）

1．教え（ロマ12:7；Iコリ12:8, 28；エペ4:11；Iペテ4:11）

パウロはローマ12:7で「教え」の賜物を紹介しており、他の箇所ではこの賜物が与えられている人の「教師」という役割を紹介しています（Iコリ12:28；エペ4:11）。ペテロが挙げている「語る」という賜物（Iペテ4:11）にも、おそらく教える賜物が含まれているのだと思われます[9]。この賜物は、**神のみことば（聖書）に教えられている真理を解説し、人々が理解できるように伝える能力**です。

第一コリント12:8の「知恵のことば」と「知識のことば」が何を指しているのかは明確ではありません。それぞれ別々の賜物であると考える人もいますが、個人的には、二つとも教える賜物を指しているという解釈[10] に納得しています。

まず、「知恵」は第一コリント1:18–2:16で聖霊によって啓示された真理を伝えること、特に「十字架につけられたキリストを宣べ伝え」ることと結びついています。

また、第一コリント14:6では「啓示か知識か預言か教えによって語る」という表現が使われています。ここにはA（啓示）→B（知識）→A（預言）→B（教え）という「ＡＢＡＢパターン」が見られます[11]。啓示と預言、知識と教えが対応しているのです。

よって、「知恵のことば」と「知識のことば」はどちらも神のみことばを教える賜物を指していると考えられます。この解釈には問題もありますが、筆者としては、今のところ最も納得している解釈です。

2．勧め（ロマ12:8）

パウロはローマ12:8で「教え」の後に「勧めをする」賜物を紹介しています。この言葉は「慰める」や「励ます」と訳すこともできるので、特に人々に慰めや励ましを与えることができる能力なのでしょう。しかし、「教え」の後に置かれているということからすると、特に**聖書の真理を実生活に適用するように勧める能力**のことであると思われます[12]。

一般的に、優れたメッセンジャーといわれる人々は、教える賜物と勧める賜物の両方を持っています。

---

[8] 各賜物の説明については、以下を参考にした。Schreiner, *Spiritual Gifts*, 19–27; Charles C. Ryrie, *Basic Theology*, revised and expanded edition (Chicago: Moody, 2007), 429–32.

[9] Schreiner, *1, 2 Peter, Jude*, New American Commentary (Nashville, TN: B&H, 2003), 215.

[10] Schreiner, *Spiritual Gifts*, 19–21.

[11] Ibid., 19.

[12] Douglas J. Moo, *The Epistle to the Romans*, New International Commentary on the New Testament (Grand Rapids: Eerdmans, 1996), 768.

3．霊を見分ける力（Iコリ12:10）

クリスチャンはみな「偽預言者がたくさん世に出てきたので、その霊が神からのものかどうか、吟味しなさい」と命じられています（Iヨハ4:1）。その「吟味」の基準は、聖書でどのように教えられているかです。「霊を見分ける」という賜物は、特にそのような「吟味」を行い、**正しい教えと偽りの教えを見分けることができる能力**のことです。

4．信仰（Iコリ12:9）

救われた人はみな信仰を持っています。この賜物は、**あらゆる物事に対して、神に対する並外れた信頼と確信を持つことができる能力**です。

5．援助（ロマ12:7；Iコリ12:28；Iペテ4:11）

第一コリント12:28の「援助」とローマ12:7および第一ペテロ4:11の「奉仕」は、おそらく同じ賜物を指しているものと思われます。これは、**様々な形で他者に特別に仕えることができる能力**です。

6．管理（ロマ12:8；Iコリ12:28）

ローマ12:8の「指導」と第一コリント12:28の「管理」は、原語の意味が似ているので、同じ賜物を指しているのでしょう。「管理」という言葉は、船長を指して使われることもあります。これは、**教会の交わりを導いていくことができる能力**です。

7．分け与える（ロマ12:8）

すべてのクリスチャンには分け与えることが求められていますが、この賜物は、**自分の持っているものを心から、大きく分け与えることのできる能力**のことなのでしょう。

8．慈善を行う（ロマ12:8）

これは病や貧困などの中にあって痛みを抱えている**他者をあわれみ、具体的な行動を起こすことのできる能力**であると思われます。

9．伝道（エペ4:11）

エペソ4:11では使徒、預言者、教師と並んで「伝道者」という役割がリストアップされています。これらの役割は、それぞれの賜物が与えられた人の役割であるため、伝道という賜物が存在していると考えることができます。

すべてのクリスチャンは伝道の務めを担っていますが、**特に人々に福音を伝え、イエスのもとへ導くための大きな役割を与えられている人がいる**ということです。

10．使徒（Iコリ12:28；エペ4:11）

第一コリント12:28では種々の賜物と並んで使徒という役割が挙げられていることから、使徒職の賜物があるということでしょう。使徒という役割はエペソ4:11にも出て来ます。

「使徒」（ギリシャ語でアポストロス）はメッセンジャーとか代理人といった意味です。第二コリント8:23とピリピ2:25では一般的な「使者」に使われています。しかし、それ以外の37回の用例では、常に「使徒」という特別な役割を指しています。

専門的な意味の「使徒」は、**主イエスがご自分の代理人として、また教会の土台としてお立てになった人物**です（エペ2:20）。有名なのはイエスが公生涯で選ばれた12使徒です（マコ3:14; ルカ6:13）。その他にも、復活して天に上られたイエスがお立てになった使徒もいます。その代表格がパウロです（Iコリ9:1）。また、バルナバ（使14:14）やイエスの弟ヤコブ（ガラ1:19）も使徒だと言われています。

現在では、この賜物が与えられている人はいません。（**3．奇跡的賜物について**参照）

11．預言（ロマ12:6；Iコリ12:10, 28；エペ4:11）

これは**神から直接、特別に啓示を受け、それを人々に伝えるための賜物**です。新約時代の預言者も使徒と同じく教会の土台であると言われているので、この賜物も終了した可能性が高いと考えられます。

12．異言

13．異言の解き明かし（Iコリ12:10, 28）

異言の賜物とは、**自分で学んだことがない言語を話す能力**です。新約の中で実際に異言が用いられた例は使徒の働きに出て来ます（2:1–13; 10:44–47; 19:1–7）。

また、この**異言を解き明かす賜物**もあります。パウロは、教会で異言を用いる時には、解き明かす人とセットであるべきだと教えています（Iコリ14:28）。

14．癒やし

15．奇跡（Iコリ12:9–10, 28）

これらは文字通り、病や傷などの癒やしを行う能力と、何らかの奇跡を行う能力です。癒やしもまた奇跡のひとつであるため、これらの賜物はある程度重複しているといえます。おそらく、奇跡の賜物には悪霊の追い出しなども含まれているのでしょう。

３．奇跡的賜物について

３－１．奇跡的賜物とは何か

広い意味では、聖霊の賜物はすべて「奇跡的」です。なぜなら、すべての賜物は神の恵みの御業によって与えられるものだからです。しかし、種々の賜物の中でも、預言、異言、癒やしなどが伴う**特に奇跡的な賜物**があります。そういう狭い意味での奇跡的賜物としては使徒職、預言、異言、異言の解き明かし、癒やし、奇跡の賜物が挙げられます。ここでは、狭い意味で「奇跡的賜物」という言葉を使っていきます。

３－２．奇跡的賜物は今も与えられるのか

今日、聖霊論に関して最も激しく議論されているテーマの一つが、狭い意味での奇跡的賜物は今も与えられるのか、それとも新約聖書が完成したことで終わったのかというものです。「新約聖書が完成したことで奇跡的賜物は与えられなくなった」という立場のことを、専門的には**終焉説**（cessationism）といいます。一方で、「奇跡的賜物は今日も与えられる」という立場を**継続説**（continuationism）といいます。ただし、継続説に立つ人の中でも、使徒職の賜物に関しては既に終わったと考えている人がほとんどです。

この問題について、私たちはどのように考えたら良いのでしょうか。
まず注意すべきは、**聖書は奇跡的賜物が終わったかどうかをはっきりと教えてはいない**ということです。なぜなら、新約が書かれた時点ではまだ預言、異言、奇跡の賜物などが用いられていたからです。筆者としては、どちらの立場も理解できますが、どちらの立場も聖書から完全に証明するのは難しいと感じています。

筆者は今の時点で、既に終了した賜物と、今日も続いているかもしれない賜物は以下のとおりだと考えています。

・既に終了した賜物：使徒、預言？
・まだ与えられるかもしれない賜物：異言、異言の解き明かし、癒やし、奇跡

まず「既に終了した賜物」についてですが、**使徒職の賜物は、間違いなく今日与えられることはない**だろうと考えています。使徒とは、イエスがご自分の代理人として任命され、特

別な権威をお与えになった役割です。パウロは第一コリント15:8で、復活のキリストが現れた人物は自分が最後だと言っています。このことは、パウロが最後の使徒であったことを示しています[13]。また、彼は「使徒たちや預言者たち」が教会の土台であるとも言っています（エペ2:20）。私たちはその土台の上に積み上げられているのであり、土台が置き換えられてしまうことはありません。よって、使徒職の賜物は既に終了したと考えられます。

難しいのは、預言の賜物です。預言の賜物が、使徒たちとともに教会の土台である「預言者たち」に限定されるのであれば、預言の賜物は終了したと考える方が妥当でしょう。また、新約聖書の完成をもって、今の時代に与えられる神の特別な「啓示」は完結しました。よって、預言が与えられる必要はなくなったとも考えられます。個人的には、こちらの考えに傾いています。

しかし、新約聖書の「預言」は、聖書に記録されるような啓示だけを指しているのではありません。初代教会の時代、飢饉が来るなど、将来に関する特別な予告が聖霊によって与えられることがありました（使11:27–28）。また、ユダやシラスといった人が「預言者」として挙げられていますが（使15:32）、彼らの預言は聖書に残されていません。

今日でも預言が与えられるとすれば、それは**聖書と矛盾する内容ではなく、また聖書の教えに付け加えられるような内容でもない**でしょう。むしろ、特定の場面で、特定の人々に与えられる限定的な励ましや慰めの言葉だと思います。しかし、そういった役割は、今では教えと勧めの賜物が担っているようにも思われます。筆者としては「**預言の賜物が続いている可能性は論理的にあり得なくはない。しかし、教会の土台である『使徒たちや預言者たち』は既に据えられているので、現在は終了している可能性が高い**」と考えています。

それでは、異言、異言の解き明かし、癒やし、奇跡などはどうでしょうか。終焉説に立つ人々の中には、新約時代の奇跡は使徒や預言者のメッセージの権威を証明する（つまり、お墨付きを与える）ものであり、使徒や預言者がいない現在では必要なくなったと主張する人がいます[14]。

これはもっともな解釈であるように思われますが、弱点もあります。パウロは奇跡を伴う賜物も含めて、その目的は「皆の益となるため」（Iコリ12:7）、また「教会を成長させるため」（Iコリ14:12）だと教えています。ここからは、奇跡の目的がメッセージにお墨付きを与えるだけではないように思われます[15]。

よって、個人的には、**今日でも教会を成長させるために、異言や癒やしなどの賜物が与えられる可能性を否定するのは難しい**と思っています。

---

[13] Schreiner, *Spiritual Gifts*, 158.

[14] John MacArthur and Richard Mayhue, eds., *Biblical Doctrine: A Systematic Summary of Bible Truth* (Wheaton, IL: Crossway, 2017), 805.

[15] David Guzick, “Strange Fire: A Calvary Chapel Response,” April 1, 2014 <https://calvarychapel.com/posts/strange-fire>.

ただし、もし異言の賜物が与えられているとしても、礼拝の中で無秩序に用いるべきではありません。パウロは異言を語る人について、解き明かす者がいなければ、教会では黙っていなさいと教えています（Iコリ14:28）。また、教会の成長のためには、異言よりも教えることの方が優っているとも考えていたようです（Iコリ14:19）。

今なお異言や癒やしの賜物が続いているとしても、聖書はそれらを積極的に求めるようにと教えているようには思われません。もし異言や癒やしなどの賜物が与えられている人がいれば、それらの賜物は適切な場面で、教会全体のために役に立つよう、注意深く用いるべきです。

終焉説と継続説のどちらが正しいのかを巡っては、かなり激しい論争が、現在進行形で繰り広げられています。しかし、**どちらに立っているかということだけで、相手を異端と決めつけないようにしましょう**。イエス・キリストが私たちの罪のために死んでよみがえられた神の子であり、この方を信じることによってのみ救われると信じているならば、その人は神にある家族です。いかなる神学論争でも、私たちはこのことを決して忘れず、謙遜でいなければなりません。

４．聖霊の賜物を用いるために

４−１．賜物を求めよという教えについて

第一コリント12:31では「あなたがたは、よりすぐれた賜物を熱心に求めなさい」、14:1では「また、御霊の賜物、特に預言することを熱心に求めなさい」と言われています。

このような教えも、文脈から切り離さずに考えなければなりません。まず、パウロは12–14章で聖霊の賜物について詳しく教えています。12章では賜物や教会に関する一般的なことを教え、13章では愛の大切さを宣言し、14章では異言や預言の具体的な特徴や用い方を教えています。14章では特に強調されているのは、異言を用いる時の注意点や、預言が異言にまさっているということです。どうやら、コリントの教会では異言の賜物が特別視されており、この賜物が教会の中で乱用されていたようです。

背景や全体の文脈を押さえたところで、文章の構造に目を向けてみましょう。12:30b–14:28は、大まかにいうと次のような構造になっています。

A_1：異言についての忠告（12:30b）
　B_1：よりすぐれた賜物を熱心に求めなさい（12:31a）
　　C_1：最も大切なのは愛である（12:31b–13:3）
　　D：愛の大切さ（13:4–13）
　　C_2：愛を追い求めなさい（14:1a）
　B_2：御霊の賜物、特に預言の賜物を熱心に求めなさい（14:1b）
A_2：異言についての忠告（14:2–28）

このようにA→B→B→Aという形になっているパターンは、専門的に「キアズム」といいます。キアズムというテクニックが使われているほとんどの場合、ポイントは中心部分にあります[16]。第一コリント12–14章の場合は、中心的な教えは「D：愛の大切さ」です。

パウロは、教会が成長するための賜物として異言よりも預言の方がまさっていると伝えることで、コリント教会の信仰にバランスを取り戻させようとしたのでしょう。そして、それ以上に愛が大切であると伝えることで、教会生活の本質を教えようとしたのです。

ここから私たちの信仰生活のために得られる適用は、たとえば、教会のために、自分の賜物に気づくことができるようにと祈り求めるということでしょう。また、教会のために、ある賜物を持った人が与えられるように求めるという適用も考えられます。

[16] Ronald E. Man, “The Value of Chiasm for New Testament Interpretation,” *Bibliotheca Sacra* 141 (1984): 148–54.

４－２．賜物と救われる前に持っていた能力

人は救われる前に、遺伝や家庭環境によってある分野に秀でていたり、楽器演奏などの技術を習得していることがあります。教会で奉仕するために与えられる能力である聖霊の賜物は、人が救われる前に持っていた能力と何か関係しているのでしょうか。

まず、救われる前に持っていた能力も、それを与えてくださったのは神です。よって、広い意味では、私たちの資質や能力はすべて神からの賜物（贈り物）であるといえます。そして、私たちはそういった能力を教会のために活かすことができるでしょう。

しかし、聖霊の賜物と救われる前に持っていた能力には、はっきりとした違いがあります。最大の違いは、**聖霊の賜物はクリスチャンだけに与えられるもの**だということです。また、聖霊の賜物は、**その人が習得したものではないことをさせてくださる**ことがあります。たとえば、奇跡的賜物は、救われる前には習得できないものです。

それでも、その人の特技や長所は、聖霊の賜物と無関係とは限りません。たとえば、何かを教えることが得意な人が救われた時、その長所を教会の中でさらに活かしていくために、聖書を教える賜物が与えられる可能性は高いでしょう。また、誰かに自分のものを惜しみなく与えることができる性格の人が救われた時、その長所を教会の成長に役立てるため、分け与える賜物や慈善を行う賜物が与えられるということも考えられます。

まとめると、**聖霊の賜物は、救われる前に持っていた能力とは異なります**。聖霊の賜物は、救われた時に、神が聖霊によって与えてくださった能力です。しかし、**その賜物は、自分自身の長所や特技と関係している可能性があります**。

４－３．どのように賜物を見つけるのか

おそらく、聖霊の賜物というテーマで読者の皆さまにとって一番関心があるのは、自分の賜物をどのように見つけたら良いのかということだと思います。

まず、賜物の種類を取り上げた際にも述べましたが、原則としては、聖書で教えられていない賜物を求めないようにした方が良いでしょう。

それでは、具体的にどうすれば自分の賜物を見つけることができるのでしょうか。聖書は、賜物を発見するために特別なトレーニングがあるとは教えていません。そもそも、賜物の見つけ方については、ほとんど何も教えられていないのです。

自分の賜物を発見する一番良い方法は、**教会生活を送ること**と、**教会で互いに仕え合うこと**です。なぜなら、賜物は教会を成長させるために、また私たちが互いに仕え合うために与えられているからです。

しかし、早く賜物を見つけなければと焦る必要はありません。また、交わりの中で賜物を見つけることにばかり集中してしまっては意味がありません。そのような姿勢は、他者に仕えるという賜物の本質から遠く離れてしまっています。

むしろ、私たちが集中すべきは、**交わりの中で、自分にできる方法で愛を実践すること**です。その中で、自分の資質や長所とぴったり合う賜物に気づくかもしれません。あるいは、自分に不可能だったことができるようになっていると気づき、そこから賜物を見出すことができるかもしれません。

また、私たちの賜物を用いて働かれるのは神ご自身（聖霊ご自身）です。私たちが自分では気づかないうちに、聖霊が私たちの賜物を用いてくださっていることもあるでしょう。

私たちに賜物を気づかせてくださるのも、賜物を用いてくださるのも神です。神ご自身が、ふさわしいときに私たちの賜物を用い、ふさわしいときに賜物に気づかせてくださいます。私たちはたとえ今賜物に気づいていなくとも、安心して、ただ神だけに信頼を置いて、教会での交わりを喜び楽しむべきです。

４−４．どのように賜物を用いるのか

それでは、自分の賜物に気づかせていただいたなら、それをどのように用いたら良いのでしょうか。

繰り返しになりますが、賜物を用いて働かれるのが神ご自身であることを忘れてはいけません。賜物を表すギリシャ語のひとつはプニューマトスでした。賜物を用いることは、私たち自身の働きであると同時に、いやそれ以上に、キリストのからだなる教会のために行われる聖霊の働きなのです。

聖霊の賜物について詳しく教えられている第一コリント12–14章で最も強調されているのは、どのような賜物にも優る愛の偉大さです。「愛は寛容であり、愛は親切です……」という結婚式で有名な第一コリント13章は、教会で賜物を用いるという文脈で語られています。**どのような賜物を用いようと、用いる時に愛がなければ何も意味がありません**（13:1）。

そして、**賜物を用いることだけが愛の実践ではない**ということにも注意すべきです。愛の実践というのは、賜物の行使に限られるほど狭いものではありません。たとえ教える賜物や伝道の賜物が与えられているとしても、兄弟姉妹の話を聞き、兄弟姉妹の必要に応え、兄弟姉妹に自らを捧げることを忘れてはなりません。

自分の賜物に気づくことができているならば、その賜物を用いた働き――たとえば教えること、分け与えること、援助すること、指導することなど――について、**聖書の中でどのように教えられているかを学びましょう**。そうすれば、自分が賜物を用いて教会でどのような役割をなすべきかが、自ずと見えてくるはずです。

私たちは、どこまでも聖書で教えられていることに基づいて、また兄弟姉妹への愛を土台として、最もふさわしいと思われる場面で賜物を用いるべきです。それによって、キリストのからだがますます豊かに建て上げられるように、互いに仕え合うのです。